



聖地赤浦の汐汲み。赤浦へは、坂浦港左手山方向と佐香コミセン辺りから海に向かう二つの徒歩の陸上ルートと坂浦港からは遊漁船で半島を仰ぎ見ながら到達できます。赤と薄いブルーの太きめの丸い石を敷き詰めた浜が印象的です。

鳥根半島
四十二浦巡り

第9号

平成26年

10月10日発行

題字/飯塚大幸一畑薬師管長

写真／一畑薬師

なぜ魅せられるのか？

會長 飯塚大幸

四十二浦巡りは、人はなぜ魅せられるのでしょうか？

四十二浦に「自分の内なる命を感じる」から、と私は思います。もう少し言うならば「生かされている貴い命に目覚めるべき誘い」があるからと申しましょう。それは、単に半島の風景が美しいのでもなく古代へのロマンというのでもなく、秘められたバールを払う興味がつきない、というだけではありません。自分が事象に相對するのではなく、それはきっと、半島を吹く風にわが命を感じ、押し寄せる汐の流れにわが命のルーツを求めているから、なのです。

私が仏教者だから感じるだけではないでしょう。多くの方がきつと同じように感じていらっしゃると思います。仏教では、「仏」ブツダ」として「真理に目覚めること」に帰依し、「法」ダルマ」として「宇宙にあらわれる森羅万象」に帰依し、「僧」サンガ」として「生かされて生きる調和の世界」に帰依します。これを仏法僧の「三宝」といい、もっとも普遍的な価値観として大切にしています。

四十二浦巡りは、いわゆる宗教ではありませんが、宗教的な体験をする人口とでも言えそうな、秘めたるメッセージを発していると思います。四十二浦巡りは、もちろん仏教ではありませんが、「自己を求める」という極めて仏教的なメッセージを内在していることは確かです。

古来、自然の中に神性を見出し畏敬し生きてきた日本人にとつて、やはり仏教の影響は絶大なものであり、かつ見えないほどに染み入るものであり、千五百年の時をかけて日本人の心を育んできたといつてよいでしょう。そして日本人には神話があります。世界のどこにでも、かつては間違ひなくあつたはずの、失われつつある大自然への畏敬の念が、ここの四十二浦には今も息づいている。それがよみがえる。そう私は説明します。

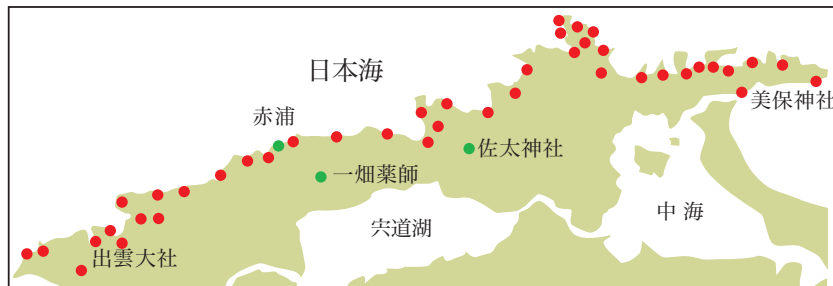
一畑薬師の本尊（秘仏）薬師瑠璃光如来は、寛平六年（八九四年）、赤浦からすくい上げられ、現在の地（一畑）にまつられました。毎年、聖地・赤浦へ汐汲みに参ります。陸路も美しいですが、海から眺める島根半島はさらに格別です。

初代・上野良亮会長の後任として、会長を拝命しました。

会員諸氏、関係の皆様の方素よりのご厚情に深く感謝を申し上げます、引き続き、ご指導ご鞭撻をお願い致し、当会が益々発展いたしますことを心より祈念申し上げます。



(二) 煙藥師管長



【島根半島四十二浦巡りについて】

島根半島に古来伝わる「四十二浦巡り」と呼ばれる海岸(浦)で汐汲みし神社を巡り歩く信仰習俗があります。この四十二浦巡りは、江戸時代盛んに行われていたということですが、いつ、何のために始まったのかは不明です。島根半島巡礼の終点は、一畑葉師とされています。